

2015年1月24日

第63回山口西田読書会

第62回(2014年12月27日)Protokoll

報告者：岡部昌平

純粹経験とは何か ―西田幾多郎『善の研究』における純粹経験のレベルに着目して―

発表者：佐野之人

『善の研究』に述べられている「純粹経験」とはどのようなものか、諸説の紹介によりその多義性を確認すると同時に、解釈者ごとにかかなりの隔りがあることが示された。新しいものから順に次のものが紹介された。

- ・小坂国継『西田幾多郎の思想』2002年、講談社学術文庫、101-102頁
- ・上田閑照『西田哲学への導き』[同時代ライブラリー339]1998年、岩波書店、96頁
- ・下村寅太郎『下村寅太郎著作集12 西田哲学と日本の思想』1990年、みすず書房、111頁

これに対置するかたちで『善の研究』における純粹経験の4つのレベルが示された。以降、各レベルのテキスト上の根拠を示しながら論が進む。各レベルは次のとおりである。

- (1) 考究の出立点としての初発の純粹経験
- (2) 思惟や意思の根柢ないし背後の純粹経験
- (3) 知的直観としての純粹経験
- (4) 最大最深の知的直観としての宗教的覚悟

※ (1) - (3) は感覚、知覚などの内容に関わらない形式的な概念。

個々の経験に妥当し、円環運動を繰り返しながら、どこまでも豊富深遠となる。

また、個々の経験が人生全体との関係において問題になるのが「道徳的善」であり、

これもどこまでも豊富深遠となり、宗教的欲求が立ちあがる(倫理学草案)。

1. 考究の^{しゅつたつてん}出立点としての初発の純粹経験(第二編)

疑いようのないものを出立点とし、「物心の独立存在」が疑いうるものとして出立点に設定されないことを確認した(II 1-2)。西田が出立点としたのは「直接の知識」であり、直接の知識は「意識現象についての知識」(この「についての」の部分が「直接」に対応する)であることが示された。そのとき「判断」がなされた場合には直接ではないことも確認された(II 1-3, I 1-1)。

- ・物心が独立に存在しない(考究の出立点としての立場であることに注意)
- ・判断が介入しない

以上の2点が初発の純粹経験の要件である。

「直接経験の事実」は「純粹経験の事実」とも言われており、これについて次のような特徴が述べられていることを確認した。

- ・すべての精神現象が、このかたちを取り得る(感覚、知覚はもちろん、記憶、思惟、感情、意志などを含む：I 1-2)
- ・我々のいかんともすることのできない事実(旧全集「純粹経験に関する断章」第16巻)

- ・主客の対立なく、知情意の分離なく、独立自全の純活動である (II 3-1)

ここでは「判断」を含む精神現象が含まれていることが示され、初発の純粹経験を理解する上での小坂、上田、下村説の形式性に対する指摘がなされた。

また直接経験の事実がどのようなものかについて、さらに能動的、構成的であると述べられていることを確認した (I 2-6, II 3-2)。

能動的、構成的である直接経験の事実は意志が根本形式 (II 3-2) であり、意識に現れる意志、思惟などの統覚から、知覚、衝動などの無意識、さらには無機物、動植物、人間などの自然界の出来事が、同一の形式で考察されていることを確認した (II 4-3, II 4-5)。その根本形式は第二編の4章と5章に2つのかたちで説明されている。

- (1) 全体 (含蓄的) → 分化発展 → 実現完成 (II 4-2)
- (2) すべての実在の背後 (根柢) に統一が必要であるとともに相互の反対・矛盾が必要 (II 5)

統一と矛盾は同一実在の両側方面であり、平等 (一) でありながら差別 (多) という矛盾を抱えていることから、自動不息であり、無限に対立する。それは「一つのものの自家発展」であり、無限なる唯一実在が小より大に、浅より深に自己を分化発展することである (動中靜)。

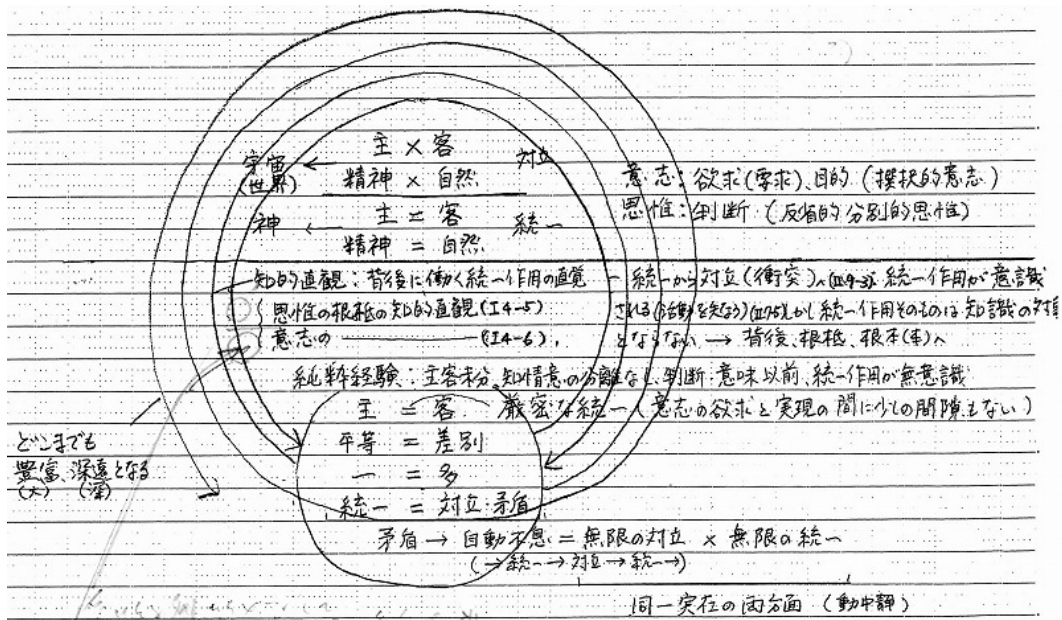
6章に記述されている「唯一実在」については、普通の解釈の立場からの説明であり、純粹経験の立場からは「個人あって経験あるにあらず、経験あって個人あるのである」(序) でことたり、との見解が示された。

また、7章以降では自然と精神、宇宙と神を同一実在の両方面として説明し「序」に述べられている「純粹経験を唯一の実在としてすべてを説明して見たい」という思いが、ここに結実してることが指摘された。

2. 思惟や意志の根柢ないし背後の純粹経験、および知的直観としての純粹経験 (第一編)

個々の思惟、意志に関するものとして円環運動のモデルが示された。

純粹経験の円環運動モデル



3. 道徳（意志）から宗教（宗教的覚悟）へ（第三編→第四編）

1) ここでは意志の統一力の根源は何か（III 2-1）が述べられており、それは生活慾などではなく、我々の實在の最も深き統一力から発現しているとされていることを確認した。

「我々の欲望或は要求は皆にかくの如き説明しうべからざる直接経験の事實であるのみならず、かえって我々がこれに由って實在の真意を理解する秘鑰である（III 4-4）。」※秘鑰は鍵の意。

これは（抽象的に）知ることはできない、体得はできる（III 9-6）とあることも確認した。

2) 我々の要求は決して孤独には起こらない。必ず他との関係上において生じてくる（III 10-3）

善とは種々なる活動の一致調和、中庸であり、理（理性）によって他を制御=人格（自己）の要求に従うことであること。また、善とは自己の発展完成（III 9-4）であり、各自がその天賦を発揮するように、人間が人間の天然自然を発揮すること。そして、人格のみが絶対的価値をもっており、肉体的、精神的欲求（富貴、権力、健康、技能、学識）も、それだけで善なるものとはいえない。などが述べられていることを確認した（III 11-2）。

3) 「善とは一言にていえば人格の実現である。これを内より見れば、真摯なる要求の満足、即ち意識統一であって、その極は自他相忘れ、主客相没するという所に到らねばならぬ。外に現われたる事実として見れば、小は個人性の発展より、進んで人類一般の統一的発達に到ってその頂点に達する」（III 13-1）

上記を取りあげて、その「達する」を問題された。實在は自動不息であるから「極」「頂点」は存在せず、道徳的善は無限進行になる。どこまでも悪を抱え込む「道徳の矛盾」が、旧全集「倫理学草案 第二」第 16 卷（253-254 頁）には述べられており、そこから「宗教的欲求」が自己に対して起こる。『善の研究』には道徳から宗教に移行する部分の記述はなく、突然に移行している。「倫理学草案」においては「道徳の極致」も「宗教論」も中断している。しかし、「宗教的欲求」が学問道徳の極致（IV 1-5）であり、根本（I 4-7）であるとの立場は明確であることも確認された。

4) 宗教的要求（IV 1-1）

『善の研究』においては突如、登場する「宗教的要求」は「自己の生命についての要求」であり、「自己の変換、生命の革新を求める」（IV 1-1）。それは生き方、見方が主観的自己から大なる生命へと転換するのであり、そのことが「我々の自己がその相対的にして有限なることを覚知すると共に、絶対無限の力に合一してこれに由りて永遠の真生命を得んと欲するの要求である」（IV 1-1）のように述べられていることを確認した。この要求は自己の要求ではなく、大なる生命からの要求である。

道徳的善（こうありたい、こうすべきだ）が無限進行（やめられないにもかかわらず、すべて崩れていく）することも、見方の転換を通じて一方より見れば、唯一實在の必然的な自家発展（絶対無限の力に合一して、これによりて永遠の真生命を得る）とみることができる。

5) 宗教的覚悟

宗教的要求の頂点であり、「見神の事実」が宗教的覚悟といわれること。そのことは「知識および意志の根柢に横たわれる深遠なる統一を自得する」「即ち一種の知的直観である、深き生命の捕捉である」（I 4-7）と記述されていることが確認された。

宗教的覚悟としての知的直観は、個別三昧、遊戯三昧に対する王三昧といえる、との見解が示された。

6) 唯一實在の発展段階

3つのレベルがあり、それぞれに次の対応が確認された。

- (1) 純粹経験レベル (IV 3-1-5, 4-4)
- (2) 分裂・反省レベル (IV 3-8, 4-3) : 純粹経験が背後にまわる
- (3) 知的直観レベル (IV 3-8, 4-3-5) : 背後にまわった純粹経験を把握するのが知的直観

4. 純粹経験とは何か ―直観と反省の矛盾を抱えた、それ故に生きた概念―

以上のように『善の研究』で述べられたことを確認した上で、西田が『善の研究』で「考えようとしたこと」として、次のような見解が示された。

西田は純粹経験を絶対確実なものとして神にも重ねたが、そうではなく「どこまでも矛盾して分からないからこそ実在と言えるのではないか」との見解が示された。

- 1) 純粹経験はどのレベルにおいても、判断しなければ純粹経験として顕にならない（存在できない）。
- 2) 統一に大小深淺のあることも、その経験を出て、以前の経験と比較し判断しなければ成立しない。
- 3) 唯一実在の必然的な自己発展である知的直観も、分別的判断がなければ可能ではない。
- 4) 分別的、反省的意識を一步も出ることができないのが我々の知識のあり方である。何事も判断や言葉を通じてしか顕わにならない。
- 5) 分別、判断の「場」そのものは、分別できない、対象化できない領域であり「我々が意識（判断）以前にすでに生きている世界」であり、西田はこれを「意識現象」「事実」と呼んだのであり、それを捉えるのは直観しかない。
- 6) 「直接の知識」は「我々がすでに生きている世界」(A) と「意識され、我々の眼前に広がる世界」(B) が直接しているという矛盾として捉えなおすことができる。
- 7) 純粹経験とは、この (A) と (B) が直接した「事実にして知識」の矛盾が絶対的であるがゆえに、生きた概念であるといえる。

※発表に対する質疑応答

Q : 分化発展の段階での統一 A と統一 B は同じものか？

A : 純粹経験である以上、同じだが、反省を経ることでより大きな統一になっている。

Q : 「神はすなわち世界、世界はすなわち神」は西田本人の言葉か？

A : 第四編、第 4 章、第 3 段落に「神は即ち世界、世界は即ち神である」がある。

Q : 知的直観の説明で「受けるところから遡って投げている」旨の喩えは本文のどこに対応するか？

A : 第一編、第 4 章「知的直観」の第 6 段落「或事を意志するというのは主客合一の状態を直覚するので、意志はこの直覚に由りて成立する」がこれにあたる。

Q : 知的直観は宗教者、芸術家がよく持ちうるものか？

A : 第一編、第 4 章「知的直観」の第 2 段落に「知的直観ということは或人には一種特別の神秘的能力のように思われ、また或人には全く経験的事実以外の空想のように思われている。しかし余はこれと普通の知覚とは同一種であって、その間にはっきりした分界線を引くことはできないと信ずる」とあり、特別な能力ではないことが述べられている。もっとも深く、もっとも豊富な知的直観が宗教者のそれになる。

Q:「我々がすでに生きている世界」(A)と「意識され、我々の眼前に広がる世界」(B)の矛盾はどういう矛盾か？

A:この(A)と(B)は相容れない関係(対立)であり、その矛盾に純粹経験があると考えている。

* * *

【報告者の哲学的問い】

「主客未分の分別」があるとしたら、それは『善の研究』と矛盾するか。

【アプローチ 1】

主客がないまま分別する状態も「直接経験の事実」に含まれるのではないか。言葉に先立ち、同時に、あらゆる言葉と矛盾する知識、分別があるのではないか。

「風がざわざわいへばざわざわのまま」に述べられているとおり、それが「風だと思ふた」判別は直接の事実であるとされている。判別においても区別はあり、精神の働きが認められる。

また、知覚された知識(直接経験の事実=ありのままの事実)は単一であることを要しないとされている(I 1-3)。「複雑」でありながら「単純なる一事実」なら、純粹経験は「厳密なる統一」に沿って(連絡を保って)「分別」「判断」する、すなわち主客未分のまま分別することをも含みうるのではないか。西田が「凡ての精神現象がこの形において現われる」(I 1-2)とし、さらに「いかなる意識があっても、それが厳密なる統一の状態にある間は、いつでも純粹経験である、即ち単に事実である」(I 1-6)と述べてあることも、これに関係しているように思える。

たしかに西田は冒頭で純粹経験を「毫も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態をいう」(I 1-1)と述べており、さらに色、音に関して「この色、この音は何であるという判断すら加わらない前をいう」として「思慮分別」「判断」を排除している。しかし、これが「判別」を許容している「風がざわざわいへばざわざわのまま」と矛盾しないのであれば、ここでの「思慮分別」は「分別」よりは「思慮」に重みがあり、「我がこれを感じている」というのも「個別の思慮によって感じていると判断する」ことで、過去の体験に照らして分類するような個別的な精神の動きを純粹な経験から除外しているにとどまるのではないか。そのように読むことが可能であれば「初発の純粹経験は、すでに豊富深遠である」と言えないか。

唯一實在としての純粹経験が最終的にすべてを包摂するためには、初発の純粹経験で除外した「思慮分別」であるとか、「判断」を含んだ意識をも取り込んでいかなければならず。その可能性は「統一力」に求められる。そこでは「統一(力)下の分別」「主客未分の分別」が生じ得るのではないか。西田自身も「しかしこの統一、不統一ということも、よく考えて見ると畢竟程度の差である、全然統一せる意識もなければ、全然不統一なる意識もなからう」(I 1-6)と述べている。

【アプローチ 2】

発表の論を借りてこの問いを説明すれば、「我々がすでに生きている世界」(A)と「意識され、我々の眼前に広がる世界」(B)があるとき、世界には(A→B)の分別と、(A←B)の分別が併存しており、言語によって構築された社会は(A←B)であるがゆえに(A)を語るができない。しかし、世界に(A→B)の分別があれば、構成的に(A)を捉えることができる。それが直接経験の知識であると考えすることはできないか。

「我々がすでに生きている世界」(A)は、人間が言語を獲得する以前の世界(言語であるとしても音声言語)で占められていると考えるのは空想にすぎないだろうか。

(原稿トメ)